

Computer Report

Vol.57 No.12 12月号 (通巻759号)

はじめの言葉

■国会での質問時間の与野党配分で、若手自民党議員が獲得議員数割とすべきだとの要望をするシーン映像がテレビに流れた。まさに「ヤラセ」を感じさせるデモンストレーションを印象付けるものだった。理由は、地元支持者から何故国会質問をしないのかと詰問されるからだという。国会という場の意味をほとんど理解できていない議員が輩出されていると言うほかない。議員の顔売り場と誤認識しているようだ。ウンザリの極みである。

■ジャパニーズクオリティ（日本品質）は世界に冠たるものとされてきた。それは、世界第二位の経済大国となった中国の生産物のチャイニーズクオリティ（中国品質）とは一線を画すものだと自負してきたのは、誰であろう日本であり、日本の企業群の誇りだった（はずだ）。しかしである、その日本品質神話を根底から崩壊させる事実が相次いで明らかになっている。基礎的品質データ数値の改竄である。ウンザリの域を越える衝撃だ。

■モンゴル力士たちにジャックされた格好の日本国技の大相撲。九州場所中にもかかわらず横綱による暴行事件が発覚、連日のマスコミ報道だ。その相撲界ジャックぶりを決定的に印象付けたのは、優勝力士による場所会場での万歳三唱である。礼に始まり礼に終わるとされる大相撲が、根底から踏みにじられ、やりたい放題されている。多くの人々が、そう感じさせられたのではないだろうか。一連の騒動報道、文字通り、ウンザリである。

■そもそも、相撲界を不快にさせてきたのは八百長問題である。第三者委員会導入が云々された背景である。問題の本質は、決して関取同士の個人的な星の貸し借りではない。八百長問題の核心は、他にある。相撲取り同士の和気あいあいを嫌った理事長がいた。その系譜にある姿勢を見せているのが孤高の貴乃花親方である。彼がモンゴル力士会を嫌悪する理由もそこにある。闇の核心に触れようとしないマスコミにウンザリする。

■かつて「鉄は国家なり」のうたい文句を大広告していた企業があった。我が国を背負って立つ日本の基幹産業だという自負を宣言していた。しかしいつしか鉄鋼、アルミ、非鉄金属などの素材品質を偽った製品出荷をするまでに至る事態が日本中を揺るがせている。いずれも我が国の超エリート社員を擁する企業ばかりである。本来、優秀な人材が集まっているはずの企業が、これほど分かり易い不正を働いたことをつくづく無念に思う。

■1980年代の世界を席卷しジャパンアズNo.1を誇示した時代、その中心的存在だった自動車産業まで社会的信頼を失墜する事態に陥ってしまった。この数十年という年月は、在勤者の総入れ替えをすると同時に、人的資源の品質レベルを完全に塗り替えるのに十分な年月だったという証明だ。文字通り、かつて誇っていた日本品質の根底が失われつつあるのだ。我が国は、限りなく経営破綻状態にある第二、第三の東芝で溢れかえっている。

■ほとんど崩壊の危機にある日本品質は、産業界、国技大相撲だけでなく、極めつけは国会の政治品質の危うさにまで及ぶ。選挙前に森友／加計学園問題で「説明責任を果たす」「謙虚な姿勢で臨む」と明言したにもかかわらず、与野党の質問時間設定に代表されるように、隠蔽体質はなお一層深まっている。日本を代表する大企業群が、愚かな基礎データを改竄／隠蔽する姿勢と同じである。日本国全体の将来が危惧される。（藤見）